

《第1回センター主催公開講演会》2008年5月29日

## 近世日本の知のネットワーク — 「魯西亜（ロシア）」関連の言説を通して—

アニック・ホリウチ\*

安永期から文化期までの50年間は、近世日本の歴史において大きな転換期にあたる。この時期に起こった一連のできごとは支配層にとっても民衆にとっても大きな衝撃であった。政治面では、瞬く間に田沼意次の興利主義的な経済政策から松平定信の厳格な緊縮主義へと移行している。この急速な変化の基は、習知の通り、天明の大飢饉である。この飢饉は大量の被害者を出しただけでなく、これについて各地で起こった暴動・打ち壊しは権力の基盤を揺るがせ、政治の方向転換を促した。また思想面では前例のない田沼の開放主義からまったく対照的な朱子学優先の学問統制の時代に移る。

ただ、これにも増して当時の幕府と民衆に衝撃を与えたのは、世紀末におこったロシア使節の二度にわたる到来である。この事件はとりわけ当時の知識層に大きな影響を与えた。

江戸時代を話題にする時、知識人ということばはあまり使われないが、ここで敢て使う理由がある。それは、この時期にこれまでにはなかったタイプの知識層が現れ、彼らの政治とのかかわり方が近代的要素を存分に含んでいるからである。

江戸時代は習知の通り儒学が全盛を迎えた時代である。18世紀の半ばを過ぎると教育機関の発展は目覚ましく、儒学的思考は社会に広くそして深く浸透する。儒学といってもさまざまな流派があり、その流派によって、学問観はかなり異なっている。当時いちばん影響力があったのが、荻生

徂徠（おぎゅうそらい）の学派である。この系統の儒学者は政治に対する感心が強く、藩や幕府の経世済民策に積極的に関わっていた。しかし、天明の大惨事はこれらの知識層に一種の失望感を与え、儒教的素養に対する疑問を投げかけ、現実に即した学問を求める思考を一層強めた。これと同時に、ロシアの接近は蘭学の重要性をあらわにし、従来の学問大系の衰退を速める結果となる。天明期から文化期までの30年間は学問史上大きな転換期に当るのはこれらの事情が背景にある。ここでは狭い意味での学問史からではなく、「知識人の歴史」という視点からこの時代を見つめ、知識層の自意識、メンタリティーや社会的地位の向上などに注目したい。ここでは、このテーマを蘭学者を中心に据えて考えたい。

この時代において、蘭学が本格的に学問として地位を確立したとするのは通説である。この説は実際杉田玄白の『蘭学事始』（1815年）に依拠している。同書によれば、江戸における蘭学は徳川吉宗の蘭学奨励に始まり、1774年の『解体新書』の出版によって大きな進展を見たと言われる。しかし、杉田玄白がこの作品においてまったく言及していないことが一つある。それは天明期から文化期まで世間を賑わしたロシア使節到来である。その理由は恐らくこれが機密事項であったからで、広く知られるのを恐れたからであろう。しかし、ロシア使節到来は『蘭学事始』の出版以上に蘭学の上昇に貢献したことは間違いない。なぜなら、ロシアは当時支配層にとって、まったく未知の国であり、蘭学者以外にこれについて情報を提

\*パリ・ディドロ大学・第7大学東アジア言語文化学部  
日本語学科 教授

供できる者はいなかったからである。本発表では特にこの点に着目し、天明から文化初期において著されたロシア関係資料を主な材料として、この時代の知識層の変遷を考えたい。

ロシア関係資料といっても、実は膨大な量の資料を含む。まずこの資料を少し整理し、その性格を述べ、どのような人物がこれに関わっているか明らかにしたい。そして、それを基に当時の蘭学者の翻訳作業がいかに政治的要求に敏感であるかを見、最後に知識人の連携を考え、彼らの共同体意識及び政治批判の態度にも言及したい。この問題を扱うため、まず初めにこの時期に起こった主な外交上のできごとを確かめておきたい。

## 1. 18世紀末におけるロシアの接近

18世紀の幕府の外交は1708年のイタリア宣教師シドッチの到来以後、半世紀に及ぶ安定期を迎えた。幕府の感心はこの間、貿易の管理に集中し、いかに日本の銅や銀の流出を押さえるかが当時の最優先の課題であった。この時代において西洋の歴史地理に対する感心はほとんどなく、新井白石がシドッチの訊問やオランダ人との対話を基に仕上げた地志である『采覧異言（さいらんいげん）』（1720年代完成）がこの頃読まれた形跡はない。同じくシドッチの訊問を基に書いた『西洋記聞』などは寛政5年になって初めて新井白石の曾孫によって將軍家斉に献上されたほどである。寛政5年とはすなわちラクスマンの根室来航の翌年である。このことから、いかにそれまでに支配層が「鎖国体制」に安住し、外交政策を問わずにいたかが分かる。

さて、この安定期の中に最初に起こったのがベニョフスキーの到来である。ベニョフスキー<sup>1</sup>はハンガリー生まれの軍人で、ロシア軍の捕虜になり、カムチャッカに流されたが、1771年脱獄に成功し、軍艦を奪ってヨーロッパに向かう。その途中、紀州や阿波に寄港し、オランダ商館宛の書簡

を遺して姿を消す。幕府はこの書簡を通して初めてロシアの南下のうわさを耳にするのだが、この時点では政策に影響を及ぼしていない。

幕府が動き始めるのは、天明期に入って松前から同じようなうわさが流れるようになってからである。田沼政権がまだ全盛であったこの頃、蝦夷地開拓の方針を打ち出すにあたって重要な役割を演じた人物がいる。それは当時経世家として名の知られていた仙台藩医工藤平助（くどうへいすけ）（1734—1800）である。彼は田沼意次の依頼で『赤蝦夷風説考』（あかえぞふうせつこう）という重要な建議書を著し、1783年（天明3年）の日付けで幕府に提出している。この建議書はいろいろな意味で驚嘆に価する文書であった。一方ではロシアの地理や歴史に関する未曾有の情報を盛り込み、ロシアの接近及び植民政策の事実を正確に掴んでおり、他方ではこの先幕府がとるべき道が通商及び蝦夷地開発にあるとはっきり断言していた<sup>2</sup>。

幕府はこれを機会に蝦夷地開拓に乗り出すが、その準備作業として蝦夷地調査隊を派遣する。調査隊には、幕府普請役青島俊蔵（あおしましゅんぞう）、佐藤玄六郎ら4名が参加し、それに加えて名もない百姓の息子、最上徳内（もがみとくない）がその数学の才能を認められて、従っている。この見分隊が行った調査はまったく前例のないものであった。厳しい気候を恐れず、多大な危険を侵し、正確な測量や綿密な観察をおこない、蝦夷人、ロシア人という「他者」の生活・行動に目を向けている。この見分隊は天明5年（1785年）に江戸を出発し、天明6年にその中間報告書が幕府の手元に届くのだが、ちょうどその時、將軍家治が病で亡くなり、政権交代が起こる。天明7年（1787年）には松平定信が老中首座になり、田沼政権とは対照的な保守政治が始まる。その影響は知識人にも及んでいる。

まず見分隊の一員であった青島俊蔵は第2回の蝦夷調査の帰り、松前藩との関係が疑惑のもとに

なり、牢中で生涯を果たすことになる。最上徳内も危うく牢中で死ぬところであったが、恩師の本多利明（ほんだとしあき）の助力によって、釈放される。彼はその後、松代定信に採用される。

ただ、学問の自由はこの松平の時代から強く制限され、知識人は公儀の反応を常に恐れながら行動し発言するようになる。この点、天明と寛政以降とはまったく雰囲気が一変している。松平政権下で起こった象徴的な事件として、林子平（はやししへい）（1738-1793年）に対する蟄居処分が挙げられる。

林子平は工藤平助とも懇意であったのだが、ロシアの接近に早い時期から不安を示し、長崎に数回赴き、オランダ商館長のフェイトからロシアの植民政策について情報を直接手に入れていた。そして、天明6年（1786年）に『三国通覧図説』（さんごくつうらんずせつ）を発刊した。この著作によって、始めて多くの識者がロシアの南下を知らされるのである。この中で、林子平は日本を囲む近隣諸国、朝鮮、琉球、蝦夷そして無人島に目を向け、その地の習俗、交易、自然環境に言及し、日本国の境界を考える必要などを主張している。彼は、さらに1791年に日本の海防政策を強く要求する『海国兵談』を刊刻する。しかし、これは幕府の怒りを招き、林子平は蟄居身分で生涯を終える。

この例からも察せられるように、この時代の特徴は大胆に発言する人物が次々と登場している点にある。これらの人物に対する幕府の対応はかなりの動揺を示している。

この松平定信の外交政策を逆転させる事件が起きる。1792年、アダム・ラクスマン率いるロシア使節団が通商を求めて、根室に到着するのである。この使節団は大黒屋光太夫他2名の漂流民を伴っていた。松平定信に代表される幕府はそのお礼として、長崎の入港を認める「信牌（しんぱい）」をラクスマンに与えた。この信牌は当時幕府が中国船に与えていた一種の貿易許可証であった。

こうして使節団は漂流民を遺し、そのまま帰航した。漂流民たちはその後江戸に護送され、江戸城で訊問を受けることになる。「信牌」を授けたからには、近い将来ロシア皇帝の使節が長崎を訪れることは時間の問題だった。そのためか、幕府は蝦夷地への探検隊の派遣、江戸湾岸の防備計画、東蝦夷地の直轄領化などといった活発な対外政策に乗り出す。ロシア関係資料が大量に生産されるのはこの時期である。1804年、ロシアはあらためてレザノフ使節団を派遣し、通商を求めるが、幕府はロシア側の要求を拒絶した。レザノフの部下は帰り際、蝦夷地（カラフト・千島）の日本陣屋をねらった乱暴を働く。この知らせを受けた幕府は一層北方政策に力を入れるが、1815年以降は徐々に緊張は緩和し、入れ代わりに進出してきたイギリスに幕府の目は向けられてゆく。

## 2. 「魯西亜」関係資料1：地理書類

以上簡単に安永から文化初期までの外交上のできごとを纏めてみた。これらのできごとは膨大な「魯西亜」関係資料を生み出す。一応ここではその概要を確認し、簡単な分類を行ってみたい<sup>3</sup>。

この魯西亜関係資料に含まれる学問書の中で一番目新しいのが地理・地誌類である。この中には蘭書をそのまま翻訳したものもあれば、複数の原典をもとに編まれた解説入りの著作もある。これらの地理書の内容が非常に豊かであることに注目したい。

たとえば、桂川甫周（かつらがわほしゅう）（1751-1809）が1793年に訳したとされる『魯西亜志』（ろしあし）を例に取ろう。これなどは以下の項目を設けている。

1. 名義
2. 幅員
3. 海河
4. 隣界
5. 風土
6. 分界
7. シベリ 名義 幅員 隣界
8. 河
9. 風土
10. 併有
11. 分界
12. 魯西亜人物
13. 教法

14. 習業 15. 政治 16. 兵制 17. 交易

これからも分かるように、国土、国境、地形や風土だけが扱われただけでなく、皇帝の歴史、世界進出、植民の歴史から国の教育や経済といった豊富な情報が盛り込まれていた。ロシア接近の中で、このような地理書類に識者の注目が集まったのは自然なことで、この手の書物の翻訳にまず蘭学者のエネルギーが集中する。

ただ蘭学者と称しても、この翻訳を試みるには二つの条件が満たされなくてはいけなかった。一つは原書を所蔵することであり、二つはそれを翻訳するに十分な蘭語の知識を持ち合わせていることである。

#### 原書について

ロシアに関する地理・地誌の情報はこの時代主に2冊の蘭書によっている。一つはヨーハン・ヒュブネル(1668-1732)の「ゼオガラヒー」(geographie)<sup>4</sup>と呼ばれていた書物であり、もう一つは「ベシケレイヒング・ハン・ルユスランド」と呼ばれていたレイツ(Reitz)の『新旧ロシア帝国誌』(Oude en nieuwe staat van't Russische of Moskovitsche keizerrijk 1744年刊)である。当時これらの蘭書は日本中探しても1冊か2冊ぐらいしかなく、極めて高価で、手に入れるのは非常に困難であった。

これらの書物が積極的に翻訳されはじめた時期は安永・天明期からである。江戸で一番にロシアの歴史、風土、風俗などに関する情報を手に入れているのが、工藤平助である。彼は『赤蝦夷風説考』において、情報源がヒュブネルの「ゼオグラヒ」と「ベシケレイヒング・ハン・ルユスランド」であることを記している。ただ、彼自身はオランダ語を読めず、他者(「鴻学の士」)から集めた知識であるといっているため、この時点ではまだ原典が長崎から伝わっている確証はない。工藤平助は吉雄耕牛という当時一流の長崎通詞と懇意であった。天明期から、オランダ通詞の江戸参府

を通じて長崎と江戸の連携が強化されるといえる。この流れは松平定信の江戸参府を5年おきにする政策によって、妨害されている。

さて、江戸での翻訳だが、江戸へ原点が伝わってからのことで、主に寛政期に入ってからである。代表的な翻訳書を挙げると以下の通りである。

江戸にては：

朽木昌綱(『泰西輿地図説』1789年刊)

桂川甫周(『魯西亜志』、1793年)、

前野良沢(『東砂葛志』(かむさすかし)1791年、  
『魯西亜本紀』1793年)

山村才助(『訂正増補采覧異言』1802年、『魯西亜国志』1805年頃)などである。

長崎にては：

志筑忠雄の『魯西亜来歴(魯西亜志附録)1795年』が挙げられる。

この中で実際に発刊された書物は比較的少なく、広く流布した書物は朽木の『泰西輿地図説』<sup>5</sup>のみである。この例を除くと、この期に著されたロシアの地理書はすべて写本でしか伝わっていない。その理由の一つは、これらの翻訳がほとんどみな幕府の注文によるものだったからである。完了後は幕府に贈呈され、広く流布することはなかったのである。一方、公儀をはばかってこの機密情報を民間に流すことを控えたことも考えられる。前野良沢、桂川甫周、山村才助などに代表される江戸の蘭学者グループがこの寛政期以降、幕府の外交に直接影響する立場にあったことは注目に値する。その中でも、桂川甫周の役割はとくに重要であるが、これについてはまた後に述べる。

上に挙げた者の中で志筑忠雄に注目したい。志筑忠雄といえば、ケンペル<sup>6</sup>の『日本志』の一部である『鎖国論』を翻訳した元長崎通詞である。彼はレザノフの使節が訪れた前後に非常に重要な文書を訳している。それは、上に挙げた『魯西亜来歴』(1795年)と『鎖国論』(1801年)、『二国会盟録』(1806年)である。この三部の著作は

いずれも珍しい知識を提供している。『二国会盟録』はアペー・プレヴォーの『旅行記集成』の抜粋であり、イエズス会宣教師のジェルビヨン(Gerbillon)による西タルタリア紀行の一つを訳している。ジェルビヨンは通訳としてロシアと清朝が結んだネルチンスク条約締結交渉に関わっており、この紀行はその締結までの経過を述べている。ケンベルの『日本志』の一部を訳した『鎖国論』が、当時の幕府の鎖国政策を正当化するのに役立ち、実際鎖国政策の存続を促したとさえいえるのと同様、『二国会盟録』も将来日本がロシアと国境を定めるにおいて役立つであろうと信じて訳されたと考えられる。志筑忠雄の翻訳はその洞察力の上で、まったく群を抜いており、長崎通詞の中でもこれほど政治的効力を意識して翻訳を行っていたものは後の時代にもない。では、地理関係の翻訳を離れて、もう一つのロシア関係資料の種類に移ることにする。<sup>7</sup>

### 3. 「魯西亜」関係資料2：報告書類

この時代に作成されたロシア関係資料の中で最も多いのが報告書類である。この時期におこった数々のできごとはすべて蝦夷地や長崎という遠方の土地で起こっており、その度に幕府は役人を派遣し、当地の状況について複数の報告を要求している。ロシア使節の到来、幕府による蝦夷地見分隊の派遣、レザノフの部下によるエトロフ島の襲撃など、どれをとっても幕府の威厳にかかわることであったので、報告書は綿密に作成され、派遣する役人も慎重に選ばれた。ここではこの膨大な資料の中で、二種類取り上げたい。

1) 一つは海外における実地調査の報告書類である。当時の日本の外交や通商政策は日本的「華夷秩序」という世界観に基づいており、その結果ほんのわずかの外国人のみが入国を許され、その外国人との交渉も限られた人材のみが許されていた。天明期から始まった蝦夷探検隊の派遣はそれ

までの外交観を一変させる。探検隊はまったく未知の世界に出動し、苛酷な気候の下、測量や観察を行い、言葉の通じない人種に接し、情報を収集することを要求された。それは西洋の長い探検史が示すように、洞察力、判断力及び科学知識が要求される作業であった。松前藩は蝦夷の事情が幕府に流れるのを恐れていたため、江戸から派遣された探検隊に対して消極的に対応した。そのため、見分隊は「土人」、すなわちアイヌの手を借りて、情報を収集するほか方法はなかった。この機会に江戸から派遣された探検隊はアイヌの存在を強く意識するようになり、さらに千島列島を南下中のロシア人(赤夷)にも接触し、遠い西洋の空気に触れることになる。

もっとも早い時期に作成された文書の例として最上徳内の『蝦夷草子』(えぞそうし)や『赤蝦夷風説考』(あかえぞふうせつこう)が挙げられる。まず注目されるのはこの著作が今まで例のない、実地調査の結果を収めている点である。それは北方の島々の相対的な位置、地形や資源に関する観察から始まり、その土地の住人の言語、生活、習俗に関わる広範囲の情報を含んでいる。これは決して平凡な役人のできる観察ではなかった。幕府の第一回見分隊に参加した最上徳内はそれまで幕府とは縁のない、出羽国生まれの百姓であった。江戸では数学や測量術を本多利明の塾で学んだ。当時北方事情に詳しいということでも有名だった本多は、徳内の才能を認め、第一回見分隊にその採用を推薦した。このような身分の低い、名声もない百姓の子がこの見分隊に付き添い役として参加できたことは、よっぽどこの探検が前例のない特殊な事業であったことを示している。最上徳内は徐々に幕府にその才能を認められ、正式な幕吏としてその後、合計10回に渡って蝦夷に渡海し、サハリンにも2回渡っている。最上徳内が作成した大量の報告書類は今だ十分に研究されているとはいえない。彼は二度目の渡海からロシア旅行を企画していたぐらいに好奇心豊かな冒険家だった。

徳内による報告書は、数学・測量・地理学・航海術的データを盛り込み、他方では人類学的考察、新しい学問の道を示している。理由は分からないが、本多にしる、最上にしる江戸の社会ではマージナルな存在だったものが、この新しい外交政策によって一気に表舞台に躍り出たわけである。

2) さて、この頃作成された報告書類の中でもう一つ注意を引くものがある。それは漂流民の訊問をもとに作成された文書類である。中国、朝鮮に渡った日本人の漂流民がオランダ人の手を借りて帰国するといった話は前にもあり、その度に報告書が作成されていたが、大黒屋光太夫と磯吉のロシア体験はその規模においてまったく前例がなかった。大黒屋は伊勢出身の船頭で、1783年に江戸に米を廻漕中難船し、アリューシャン列島のアムチトカ島に漂着し、そこで2年間過ごした後、ロシアに渡り、キリール・ラクスマンに会い、この学者の強力な助力の結果、サンペテルブルグまで出かけ、エカテリーナ二世に直接帰国願いを伝え、彼女の許可を得た。1792年にロシアを出発し、キリールの息子のアダムの指揮するロシア船で帰国する。この体験を伝える文書の中でもっとも有名なのは、桂川甫周によって1794年に完成を見た『北差聞略』である。桂川甫周は幕府の奥医師で、代々医学で名をなした桂川家の子孫で、蘭学にも若い時から馴染み、『解体新書』の翻訳作業にも早い時期から従事した。その鋭敏な性格は彼に近付く者すべてに強い印象を与え、日本に1年間滞在したスウェーデンの学者のツユンベリーも帰国後著した『日本紀行』に桂川の名前を載せている<sup>8</sup>。『北差聞略』は機密文書だったので、当時流布した形跡はなく、ほんの少数の人間の目にしか触れていない<sup>9</sup>。この例からも、外交文書作成にいかにも蘭学者の力が要求されるようになったかがわかる。また同時に、桂川甫周の名声は民衆においてもこの時広がったことは間違いない。彼は当時画期的な役割を演じた蘭学書に序文を寄せて

おり、弟の森島中良の読み物（蘭学の啓蒙に大いに貢献した）を通して、その名前及び考えが広く知られていた。

#### 4. 「魯西亜」関係資料3：経世論類

以上扱ってきた資料は主に蘭書の研究か実地調査を基に書かれた文書で、個人的な見解や註が多少入ることはあっても、本人が自由に選んだテーマについて書いている文章ではなかった。これから扱おうとする資料はその点異なり、著者が天明・寛政期のロシアの接近という事件に対して自由に発信した文章からなる。

18世紀において、経世論というと、主に藩や幕府の財政を立て直し、民衆の苦しみをやわらげ、武士の威厳を再生する主張を意味した。経世論でいちばん有名なのは、荻生徂徠の『政談』で、これは1725年ごろの著作である。これは刊行されていないが、写本として広く流布し、その思想の系列は後の学者に受け継がれた。しかし、天明・寛政期になると従来の経世論とは質的に異なる経世論が現れる。異なるところは、己の身分を顧みず藩政という枠から離れ、直接幕府に向かって政治の変更を訴えるか、または公儀の政策を自由に批判している点である。もっとも典型的な例が林子平である。林子平は武士出身であったが、定まった職を持たなかった。彼は仙台藩主に向かって何度か上書したことがあったが、ロシアの南下の危険を知った後は日本国の海防を扱った著作を発表しはじめる。『三国通覧図説』や『海国兵談』などがそれである。ここで注目には桂川甫周の序文が、後者には工藤平助の序文が寄せられている点である。これらの学者の序文は、一方では林子平の発言に学問的正統性を与え、他方では政治的な助力を提供するものであったろう。これはまた権力に対する団結をも意味している。

まったく同時代に書かれた工藤平助の『赤蝦夷風説考』も、幕府の依頼によって書かれたものと

はいえ、経世論の種類としてはまったく異質なものであることは違いなく、従来の外交政策の変更を主張し、ロシアとの通商を開くよう求めている点でも自由な発想を提出している。自由な発想といえば、群を抜いているのが本多利明の経世論である。本多利明も林子平同様正式な職を持たない武士で、学問を利用して名をなすことを目指した人物である。数学が得意で、関流数学を教える塾を江戸で開き、最上徳内とはそこで出会った。経世論者として数多い著作があるが、ほとんどが写本で伝わっている。松平定信と縁が深かったとみえて、幕府の機密情報を手にしており、最上徳内を通して蝦夷地やロシアに関する情報をいちばんに入手している。本多利明関係の文書を繙くと、大勢の学者と交流し、書簡を交わし、蘭書を手に入れては翻訳させ、情報を水戸藩の同志に流したり、おおいに活動していることが分かる。本多利明の経世論は日本国レベルの政治を問題にしており、蝦夷地の開発、西洋諸国に倣った植民地政策、領土拡張、カムチャッカを都とする大日本の構築など、それまでの経世論とは一風違ったものを提出している。このように、定まった職のない人物が公儀に上書し、思いきった政策を提示したのがまさに天明・寛政期の特徴である。

## 結び

以上の研究を通してあきらかにしたかったのは、この18世紀末、19世紀の初めにおける特別な国際状況において、学者の社会的地位が急激に向上し、その結果学者の政治意識が大きく変化したという点である。学者と一言でいっても、さまざまなプロフィールを含むが、この時に社会的に上昇した学者は明らかに蘭学者、及び蘭学の成果に通じている者である。そして蘭学といっても、とりわけ世界地理に詳しいものが中心になっている。これらの学者はロシアの接近を機に幕府の政治に直接影響する立場に置かれるようになり、そ

れは彼らの政治意識に大きく影響したと思われる。今日の発表ではこれらの学者を結ぶネットワークについてあまり詳細に述べることはできなかったが、ちょうどこの頃現れた芝蘭堂での新元会（オランダ正月）の集会はこのネットワークの形成を物語っている。寛政6年の最初の芝蘭堂新元会の様子を描く有名な図を見るとおもしろいことに大黒屋光太夫がこれに参加しており、一人ロシア人の服と帽子をしてイスに座っているのは一説では薩摩藩主の島津重豪（しまずしげひで）だとされる。この雰囲気からロシアの接近及び光太夫の帰国がこのネットワークの形成、これらの学者の地位向上に重要な役割を果たしたと想像するのはそう間違ったことではないであろう。

## 注

- 1 Moric Benyovsky
- 2 工藤平助についてはまた後に述べるが、ここで一つ注意すべきは幕府の最高地位にいる田沼意次が仙台藩の医者意見を入れていることである。この例からも察せられるように、この時代になると幕府は人材登用や情報収集に真剣に取り組むようになる。
- 3 まず初めにここでいう「魯西亜」関係資料が「魯西亜」を直接題材にしたものだけではなく、間接的に「魯西亜」に言及しているものも含むことを断っておく。たとえば、蝦夷地関係の報告書類も「魯西亜」関係資料の類に入るわけである。林子平の『三国通覧図説』の例からも明らかなように、当時蝦夷地を話題にすることは多くはロシアの動向について語ることを意味したからである。
- 4 実際、この名で呼ばれた書物は一冊ではなく、三冊あり、『古今地理学問答』（1693年刊）、『完全地理学』（1730年刊）『一般地理学』（1761-1766年）といった18世紀ヨーロッパで版を重ねて広く流布した書物である。上に挙げた桂川甫周の『魯西亜志』はこの最後の『一般地理学』（Allgemeine Geographie）の翻訳である。
- 5 朽木昌綱は、いわゆる「蘭癖大名」といわれる福知山侯で、オランダ語に通じていたことは有名でイザック・ティチングと書簡を交わしている。『泰西輿地図説』はヒュブネルのゼオグラフィをはじめ、複数の蘭書を利用した世界地理書で地図を多く盛り込んでおり、当時広い読者層を獲得したこ

とで知られている。

6 Engelbert Kaempfer

7 志筑忠雄のまったく群を抜いた業績は長崎に埋もれたまま忘れられる可能性があったのだが、たまたま大槻玄沢が長崎に遊学した時に、志筑を発見し、後に息子の玄幹を通して江戸に伝わることになる。また『鎖国論』なる文書は当時としては驚くほど広く流布していることは有名である。

8 その結果、桂川甫周の名は世界中に知れ渡るようになった。

9 この体験記は桂川甫周の業績の中で重要な位置を占めている。これはそれまで蓄積したロシアの地理歴史に関する知識（『魯西亜志』）を利用し、光太夫の体験の正確且つ明晰な記録を伝えている。

参考文献

秋月俊幸著、『日本北辺の探検と地図の歴史』、北海道大学図書刊行会、1999年。

Horiuchi, Annick 《When Science develops outside State Patronage: Dutch Studies in Japan at the turn of the Nineteenth Century》, *Early Science and Medicine*, VIII-2, 2003, p. 148-172.

Horiuchi, Annick 《Le *kaikoku heidan* [De la défense des pays maritimes] de Hayashi Shihei, traduction et présentation de la préface》, *Ebisu, Etudes Japonaises*, n° 38, *Automne-hiver*2007, p. 83-103

岩崎克巳、「ゼオガラヒの渡来と影響」『書物展望』第10巻12号、468-476頁。

*Journal of the Japan-Netherlands Institute*, volume IX, 2008, 《The Patriarch of Dutch Learning Shizuki Tadao (1760-1806), Papers of the symposium held in commemoration of the 200th anniversary of his death》.

森銃三著、「最上徳内」『森銃三著作集』、第五巻所収、1989年。

大友喜作編、『北門叢書』、第一巻、1972年。

鳥井裕美子、「『鎖国論』、『二国会盟録』に見る志筑忠雄の国際認識」『志筑忠雄没後200年記念国際シンポジウム報告書・蘭学のフロンティア—志筑忠雄の世界』所収、長崎文献社、2007年、82-90頁。

山下恒夫編、『大黒屋光太夫資料集』、全四巻、日本評論社、2003年。